

Celebrating Yvonne Lefébure's harmonics

DINU LIPATTI インタビュー

アンリ・ジャトン (H.J.)

ラジオをお聴きの皆さま、ルツェルン音楽祭第2回シンフォニーコンサート中継の折にはエルネスト・アンセルメ氏ご本人のお話をお聴きいただき嬉しく思いました。本日は私のお隣のマイクにルツェルン音楽祭第5回シンフォニーコンサートのソリスト、ディヌ・リパッティ氏をお迎えすることができ、喜びに堪えません。このプログラムについて、また、これから皆さまにお聴きいただく作品についての印象をリパッティ氏にお尋ねする前に、私は皆さまに代わりまして、今日、氏が全快に向いつつあることへの慶びをお伝えしたいと思います。

さて親愛なるリパッティさん、よろしければ、ピアニスト、リパッティ氏への本題に移らせていただきます。今回のプログラムにモーツァルトの協奏曲をお選びですので、モーツァルトのレパートリーに特に精通しているあなたに伺いたいのですが、初期の作品から、晩年の変口長調やこれから演奏されるハ長調などの作品に至るモーツァルトの協奏曲について、書法の点でのピアニスティックな発展といったものを見出すことはできるでしょうか？

ディヌ・リパッティ (D.L.)

より重要ではっきりした発展は、独奏ピアノのパートよりも、モーツァルトの協奏曲におけるオーケストラとピアノとのシンフォニックかつポリフォニックな書法に見られます。私には彼がイタリア的なものから出発してドイツ的なものへ到達するよう思えます。今私は、抗し難い手段でベートーヴェンの初期作品を思い起こさせる、モーツァルトの最後のハ長調協奏曲のことを考えているわけです。

H.J.

しかし、ピアノの書法、華麗な楽句や技巧性は、モーツァルトの全ての協奏曲の構成でほぼ同様の手法によって作られていると見做しておられるんですね。

D.L.

そうです！それは初期の書法にかなり忠実だったと思います。私にとって、モーツァルトのピアノの楽句の変化は、ピアノ協奏曲における彼の総体的でポリフォニックな思考の変化に比べて、より小さなものです。

H.J.

確かにあなたはそのピアノ書法を深く分析されたはずですね、これから聴かせていただく協奏曲の第一楽章と最終楽章のカデンツァの作曲者はあなただと存じておりますから。

D.L.

その通りです。私は自分でカデンツァを書きます、でもカデンツァの書かれていないモーツァルトの協奏曲のためだけです。そうでなければこんな不遜なことを自分に許しません。

H.J.

そしてカデンツァを作曲するにあたって、普通どんな方針に基づかれていますか？モーツァルト時代の古典的原則だった即興の原理のみを指針にされるのか、または前もって決めたプランとしてあなたの中で完全に決定した構成があるのですか？

D.L.

もし私が演奏会でカデンツァを即興演奏できたら…ああ、もはや私たちにはできません、我々の世紀にはそうしたトレーニングがなくなってしまったから…勿論即興がいいと思います。それができないので、私は紙の上で即興しながらカデンツァを作り上げるよう努めています（もしそう表現してよいならですが）、つまりその協奏曲の全ての素材を活かし、作品のスタイルからできるだけみ出ないように、しかしピアノ書法の中にモーツァルト以後に獲得されたものも加えつつ。なぜならこのカデンツァとは、つまるところ、1950年においてモーツァルトのテーマを基にその指に浮かんだ着想を奏するソリストの行為なわけですから。

H.J.

いずれにせよあなたは、ご自身がその全ての可能性を駆使してきた現代ピアノの性能を重視されているのでしょうか。

D.L.

まさにその通り、現代のピアノの共鳴はモーツァルト時代のピアノの共鳴とは全く違うものです。私は後の時代に現れた改良されたテクニックと装飾音を、ハーモニーや書法の点ではスタイルを逸脱しないようにカデンツァに導入しなければならぬと思います。

H.J.

そのようなピアノへの知識、わけてもオーケストラとのバランスについて、あなたはかつて「ルーマニア舞曲」で証明なさいました。独奏ピアノはあなたご自身で、私の記憶が確かなら数年前アンセルメ氏の指揮で演奏された作品です。あなたのお考えでは、その場合の独奏楽器とオーケストラのバランスの取れた状態とはどのようなものでしたか？

D.L.

「ルーマニア舞曲」で、私はピアノに肩身の狭い思いをさせっぱなしでした、というのもオーケストラの編成がとても大きいからです。また「舞曲」におけるピアノはオブリガートの役目以外の何物でもなかつもりです。もし、私が望んでいるように、近い将来ピアノ協奏曲を書くとしたら、その反対のことに努めるでしょう、つまりオーケストラの編成を小さくするのは。それぞれの独奏者が自らを思うままに表現する自由さを持った一管編成で、しかしピアノは王者として君臨する地位を占められるようにします、つまりショパンがピアノに与えた地位、今日我々が大編成のアンサンブルの傍らにあって放棄せざるを得なくなった地位です。

H.J.

「ルーマニア舞曲」についてお話を伺っておりますが、「舞曲」を作曲されて以来、何か他の作品をお書きになりましたか？

D.L.

残念ながら、ほんのわずかです。私個人の創作活動において、近年は重い病気に苛まれてほんのわずかな作品しか書けませんでした。管楽器のための四重奏を一曲と歌曲をいくつか… それらは作品としてほとんど体をなしていないものです。しかしこの冬はもっとたくさん作曲したいと願っています。

H.J.

それを伺って私たちも嬉しく思います。結びに、リパッティさん、最近旬の話題についてよろしいですか。リハーサルの際、私は思ったのですが、オーケストラの伴奏にあなたはかなりご満足の様子でしたね。祝祭管弦楽団にはどのような感想をお持ちですか？ご存知のようにそれぞれのシンフォニーコンサート毎に、ほとんど、確実と言えるほど指揮者が変わるので、彼らは相当な柔軟性を示さなければならぬと思いますが。

D.L.

それが正に私の驚くところ、感嘆する点です。つまり、実際はさまざまなメンバーによる混成オーケストラなのに、彼らは均質な一体性と驚嘆すべき結集力を持っているんです。私にとって、モーツァルトの伴奏は夢のようなものでした。カラヤンさんは見事に伴奏してくださいましたし、私はこのアンサンブルがまるで年間通して同じメンバーで活動している常設の楽団であるかのような印象を受けました。あらゆる点において傑出したオーケストラです。

H.J.

親愛なるリパッティさん、あまりお時間を頂戴し過ぎたくありませんし、間もなく始まるコンサートの前にきっとご休憩をお取りになりたいことと存じます。ラジオをお聴きの皆さまに代わりまして、この時間をお割り下さいましたことへのお礼を申しあげます。皆さま、今宵のプログラムについてのこれほどに明晰で生き生きとした解説の後で、ディヌ・リパッティ氏の演奏をお聴きなることが、皆さまにさらに一層大きな喜びとなりますことを確信しております。